韓国ドラマに深くときめく

# 1冊でつかむ韓国二千年の歴史と人物

康熙奉
Kang Hibong

人物がわかる
背景がわかる

三国時代
（高句麗、百済、新羅）から
高麗王朝を経て
朝鮮王朝にいたるまで。

こんなに面白い
# 韓国史！

韓国ドラマに深くときめく

# 1冊でつかむ韓国二千年の歴史と人物

康 熙奉

星海社

284

SEIKAISHA SHINSHO

## はじめに――称賛と哀惜を込めた物語が始まる

もしも夢の中で、時空を超えて朝鮮半島の歴史的な人物に会えるとしたら、ぜひとも端宗（タンジョン）の姿を見てみたい。彼の底知れない無念さを少しでも理解したいと思っているからである。

話は１４５０年にさかのぼる。

「史上最高の名君」と称賛された朝鮮王朝４代王の世宗（セジョン）が亡くなったあと、国王を引き継いだのは長男の文宗（ムンジョン）だった。

彼は父親とよく似ていてとても聡明だったので、長く国王を務めたら名君になるのは間違いなかった。しかし、病弱だったために、即位からわずか2年あまりで世を去ってしまった。これが悲劇の端緒となっていった。

文宗の長男であった端宗が6代王として即位したが、そのときは11歳だった。あまりに年齢が幼すぎた。さらに不運だったのは祖母と母がすでにこの世にいなかったこと。もし

も王族女性の長老が存命であったならば、成人に達していない国王のために摂政を任せることができたはずなのだ。そうやって代理政治を行った上で成人すれば、端宗も無事に国王として親政を始めることができたであろう。

しかし、王族女性の長老がいなかったので、端宗の後見人として指名されたのが高官の金宗瑞（キム・ジョンソ）であった。

かつての彼は「虎」と称されるほど勇猛果敢な忠臣であったが、すでに隠居間近の高齢となっていて、端宗を守り切るには不安があった。そこをズバリと突いてきたのが、世宗の二男であった首陽大君（スヤンデグン）だ。彼は文宗の弟。つまり、端宗の叔父なのである。非常に野心的な男であり、本来なら王位を継げない傍流の身分であったにもかかわらず、国王になることに執着していた。

この首陽大君は用意周到に反乱の準備をしたあげく、１４５３年に金宗瑞を殺して一気に実権を掌握した。

さらに金宗瑞の同志をことごとく殺害した首陽大君は、１４５５年には端宗を露骨に脅して王位を奪い、すかさず7代王・世祖（セジョ）として即位した。

抵抗できなかった甥の端宗は上王として遇されたが、それは形だけだった。彼はさんざ

ん卑下された上に、最後には魯山君（ノサングン）という格下の扱いとなって位階を下げられた。さらに、寧越（ヨンウォル）という僻地に配流されてしまった。

この場所は元の国王が住むにはあまりにひどいところだった。しかも、提供される食事も粗末だ。それだけでも悲惨なのに、非道な世祖は端宗に対して死罪を命じた。それは1457年のことで、端宗は16歳になっていた。

世祖の命令で使者は毒薬を持ってきたのだが、申し訳ない気持ちが強すぎて渡すことができなかった。

かつての国王の前でずっと頭（こうべ）を垂れているだけ。やむをえず、端宗が自分の首に紐を巻き、窓の外に控えていた侍者にそれを引っ張れと命じた。

侍者は固辞したのだが、端宗に強く要請されて仕方なく言われたとおりに紐を引っ張った。結局、端宗は世祖が送ってきた毒薬を拒否し、自ら死を選んで抵抗の意思を示した。このように、端宗の最期は後世の語り草になるほど堂々としていた。

しかし、その遺体はいったん放置されてしまった。世祖の怒りに触れることが怖くて、誰も端宗の遺体を納めようとしなかった。同じく反逆者にされることをみんな避けたかったのだ。

端宗が流罪となった辺境の寧越は地形がとても複雑だ

端宗の陵墓

それでも、志が強かった義士の厳興道（オム・フンド）が、端宗の残された遺体を丁重に埋葬した。周囲の人は、遺体に触れるのは危険すぎると止めたのだが、厳興道はひるまず敢然と断言した。

「正しいことをして処罰されるのなら本望である」

こうした人がいたことに救われる。死を賭して「本望」に生きる人たちが恥ずかしくない歴史を作ってきたと思えるからだ。

しかし、実のところ、「恥ずかしくない歴史」というものが、２０００年の間にどれほど繰り広げられてきたのか。むしろ、「不誠実な歴史」がはびこってしまったことも多かったのではないだろうか。

歴史は人間が記録するものだ。そこには、感情を揺さぶる逸話があれば、耐えがたい悲劇もある。そんな「ありのままの歴史」を称賛と哀惜を込めて物語のように披露していこう。その中で、端宗のような国王がいたことを思い出してくれたら本望である。

康　熙奉

# 目次

はじめに　称賛と哀惜を込めた物語が始まる　3

## 第1章　韓国の歴史を知るための「究極キーワード10」　15

1　本貫　個人の血統を如実に表す先祖の出身地！　16
2　族譜　一族の初代から延々と記録されてきた家系書　18
3　韓国人の姓　5大姓だけで韓国全体の半分を超えてしまう　20
4　儒教　現在でも生活規範に大きな影響を及ぼしている　22
5　身分制度　過去の遺物が現代韓国でどんな亡霊になっているか　24
6　男尊女卑　男性優位の価値観が圧倒的に支配していた　25
7　仏教　追放された仏教寺院は山中に移って行った　27
8　檀君神話　民族誕生の起源とされる物語　30

9 陰陽五行説　自然界の調和を求める考え方の根本となっている 34
10 食生活　韓国を代表する料理は歴史の荒波から定着していった 39

## 第2章 通史でよくわかる「王朝二千年の歴史」 43

1 神話から史実の世界へ 44
2 それぞれの建国 47
3 高句麗の隆盛 48
4 百済の栄華盛衰 51
5 新羅の発展 55
6 百済の滅亡 56
7 白村江の戦い 59
8 三国統一と渤海 62
9 後三国時代から高麗時代へ 64
10 門閥貴族政治と武断政治 67

11 蒙古襲来 70
12 起死回生の威化島回軍 71
13 朝鮮王朝の建国 73
14 癸酉靖難というクーデター 76
15 基本法典の完成 79
16 恐るべき暴君 83
17 戦乱から復興へ 85
18 悲劇の世子餓死事件 88
19 勢道政治の弊害 91
20 攘夷と開国 93
21 朝鮮王朝の終焉 94

第3章 英雄たちが躍動した「三国時代の人物」 99

1 朱蒙 神話と伝説に彩られた「高句麗の始祖」 100

2 近肖古王　百済を強国に導いた勇猛な統治者 102
3 広開土大王　歴史上の最大領土を築いた唯一無二の大王 105
4 武寧王　民衆から慕われた百済の名君 108
5 ピョンガン王女と温達　永遠に語り継がれる歴史エピソード 110
6 真興王　花郎を作った新羅の戦略的な国王 115
7 乙支文徳　空前絶後の大勝利を挙げた巨星 117
8 淵蓋蘇文　残虐ながら巧みな戦術眼で高句麗を守り抜いた 120
9 善徳女王　霊感がとても強かった救国の女王 122
10 金庾信　これぞ三国統一の立役者！ 125
11 張保皐　国際性を身につけた新羅の貿易王 128

第4章 逆風を耐え抜いた「高麗王朝の人物」 131

1 王建　政略結婚を繰り返して統一王朝を築いた 132
2 光宗　名君から暴君になった極端な国王 134

3 千秋太后　悪名と称賛の狭間で強烈に生きた女傑 136
4 金富軾　『三国史記』を書いた「歴史の巨星」 138
5 裵仲孫　「抵抗精神」の象徴であった三別抄を率いた猛将 140
6 奇皇后　美貌と権力によって彩られた怪物のような皇后 145
7 李成桂　高麗王朝最後の将軍が新しい時代を開いた 148

第5章 聖君から暴君まで「朝鮮王朝前期の人物」 151

1 太宗　王朝の確固たる基盤を作った大王 152
2 世宗　ハングルを作った史上最高の聖君 154
3 燕山君　王朝を存亡の危機に陥らせた最悪の暴君 157
4 申師任堂　最高額紙幣の肖像画にふさわしい芸術と教育の担い手 160
5 李舜臣　海上に現れた空前絶後の戦術家 163
6 許浚　多くの人の命を救った「不朽の医学書」の著者 168
7 光海君　暴君ではなく名君になれる器であった 170

8 仁祖　愚かな外交で屈辱にまみれた国王 175

第6章 幸福でない運命に操られた「朝鮮王朝後期の人物」 181

1 粛宗　戦略的に国王の権威を飛躍的に高めた策士 182
2 張禧嬪　「絶世の美女であった」と歴史書が証明した 184
3 思悼世子　監禁された米びつの中で絶命した世子 189
4 英祖　朝鮮王朝で一番長生きした国王 194
5 正祖　才能と人格に優れた正真正銘の名君 198
6 貞純王后　政敵をつぶすために数万の庶民を犠牲にした 202
7 丁若鏞　長き流罪も経験した「思想と実学の大家」 204
8 興宣大院君　権力者に卑屈な姿を見せて逆転を狙った 206

おわりに　悲劇的な歴史が名誉を取り戻す物語 209

［年表］古代から朝鮮王朝までの王朝盛衰の記録 212

［資料］

五行の関係図、五行の方角と色 37
5世紀の三国時代勢力図 50
10世紀初めの後三国時代の勢力図 66
朝鮮王朝の主な中央官庁 82
朝鮮八道図 87
高句麗の重要な国王 220
百済の重要な国王 221
新羅の重要な国王 222
高麗の重要な国王 223
朝鮮王朝の歴代国王 224
図説／歴史はどのように変わったか 226

写真／植村誠、康熙奉　イラスト／竹口睦郁　図版／ジェオ

第1章

# 韓国の歴史を知るための「究極キーワード10」

# 1 本貫

## 個人の血統を如実に表す先祖の出身地！

これを知らないと韓国人の正体が絶対にわからないと言えるのが「本貫（ポングァン）」である。個人を特定するときに「姓名」が真っ先に表に出るのだが、これだけでは本人の出自がまだ正確ではない。本当に知りたければ、絶対に本貫を聞きださなければならないのだ。それを知ってこそ、「ああ、この人はそういう出身なんだ」と納得できる。その重要性がわかっているので、このキーワードでもトップで本貫を紹介している。

本貫とは、その一族の姓氏が誕生した土地のことだ。もっとわかりやすく言えば、一族の始祖の出身地である。

普通、韓国人は自分の姓氏を詳しく言うときには本貫をつけて、「私は○○金氏です」「僕は○○李氏です」と言う。この○○に本貫が入る。

たとえば、同じ金氏といってもその一族の始祖が家門を立てた地域によって異なる。金氏だけでも金海（キメ）、慶州（キョンジュ）、江陵（カンヌン）、光州（クァンジュ）、安東（アンドン）など数多い本貫がある。

実務的な調査によると、韓国人の姓氏は２９０あまりだが、本貫は４３００余もあるという。正確に言うと、４３００余の姓氏が存在するということと同じなのである。

そして、姓氏が同じでも本貫が違えば同族ではない。必ず姓氏と本貫が一緒の人だけが同族である。さらに言うと、２００５年の法律の改正前までは、同姓同本（同じ姓氏で同じ本貫）同士の男女は法的に結婚できなかった。そこまで本貫は重んじられてきたのだ。

このように、「本貫＋姓氏」によって常に自らの血統を明らかにしている韓国人。父系を中心として続く血統の定義を重んじてきたので、結婚しても女性の姓氏は変わらない。それは、その女性の血統が永遠に変わらないからだ。つまり、その人の血統を表すために厳格な姓氏制度を守っているのだ。

それゆえ、韓国では今でも誰もが自分の本貫を知っており、同じ姓氏に会うと本貫がどこなのかを聞く。それによって、相手がどんな血統を持っているのか……すなわち、どんな家柄の出身なのかがわかるのだ。

しかし、先に触れたように、本貫の存在は父系の血統の重視に他ならない。時代が大きく変わってきた現代で、本貫はどこまで個人の特定に関わっていけるのか。本貫にとらわれない発想も今後は増えていくかもしれない。

## 2 族譜

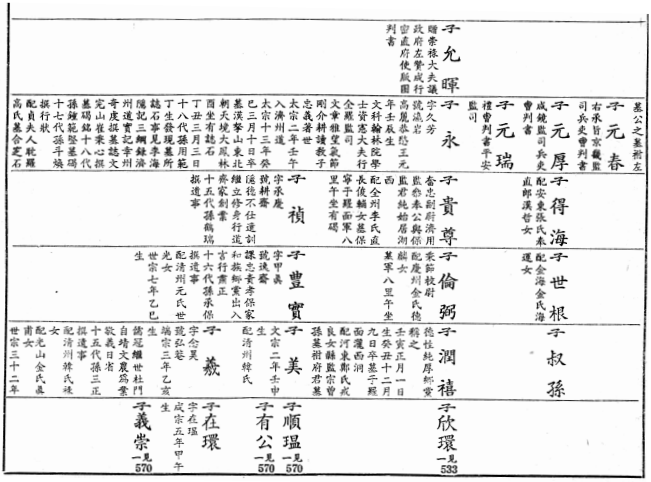
### 一族の初代から延々と記録されてきた家系書

族譜（チョッポ）とは、一族の詳細な家系を記した書物のことである。「大同譜」と言われることも多い。

私は信川（シンチョン）康氏（カンシ）〔信川を本貫とする康という姓の一族〕の出身で、我が家の保有する族譜は、精緻な内容の１０００ページの本が４冊で構成されている。持つだけでも重いこの書を手に取ると、私という28代目から草創の初代まで、家系を正確に遡ることができる。それゆえ、族譜を開く度に、この記録を続けてきた人々の不断の努力と継続性に深く感銘を受ける。なにしろ、族譜の中身は一族の人々の出生年、父親との続柄、肩書、経歴、墓の位置などが記されており、その保存性は驚嘆するほどである。

そして、多くの一族は一定の周期（30年や40年）で、族譜を更新し続けてきた。各一族には、「宗親会」と称される組織が存在し、その組織が族譜の編纂を担っている。

だが、誤解しないでほしい。私の一族が特別に族譜を所有しているわけではない。韓国のあらゆる一族が族譜を持ち、その記録は子孫たちに今も大切に継承されている。韓国に




族譜には各人の出生年、父親との続柄、肩書、経歴、墓の
位置などが記されている

先祖に捧げる祭祀の御膳はこのように並べる

おいて、族譜を持たない一族など、考えられないのである。

日本の場合、数世紀にわたる家系図を有する家は、比較的少ないかもしれない。一方、韓国においては、自らが30代目であれ、40代目であれ、先祖を遡り初代まで辿り着くことができる。

そうした先祖を敬う気持ちが祭祀にも表れている。両親、祖父母、さらにその先の先祖に感謝する儀式が韓国には多い。その気持ちが族譜の重要性にもつながっている。

すべて、何世紀もの間、族譜を持続的に編纂してきた結果である。そのための尽力と時間がどれほどのものだったかを考えると感慨深い。それらの努力を他のことに向けたら、どれだけの成果が得られただろうか。けれども、どんな経済的困難が訪れようと、先人たちは族譜を受け継ぎ、そして次世代に伝えてきたのである。

## 3 韓国人の姓

### 5大姓だけで韓国全体の半分を超えてしまう

日本人の姓は29万もあると言われているが、韓国の人々の姓は、漢字の一文字が基本であり、その種類はわずか300足らずに過ぎない。その中でも、圧倒的に多い姓が「金（キ

ム）」である。韓国の人口に占める「金」の割合は21・6％にも上り、5人のグループがいれば、統計的に1人以上は「金」という姓を持つことになる。このため、姓だけで人を呼ぶと多くの人が振り向くこととなり、韓国ではフルネームでの呼称が基本となっているのだ。友人同士では、姓ではなく名前で呼び合うのが一般的である。

2位の「李（イ）」は14・8％、3位の「朴（パク）」は8・5％と続く。これら3大姓だけで韓国全体の44・9％を占めるという、驚愕の占有率である。4番目に多いのが「崔（チェ）」の4・7％、5番目の「鄭（チョン）」が4・4％である。これら5大姓を合わせると、なんと54・0％にも上る。わずか5つの姓で半数を超えるというのは、韓国人の姓がいかに少数に偏っているかを示す証左である。

さらに、よく見かける「著姓」には、「姜（カン）」、「徐（ソ）」、「安（アン）」、「高（コ）」、「裵（ペ）」、「河（ハ）」、「具（ク）」、「趙（チョ）」、「韓（ハン）」、「権（クォン）」、「柳（ユ）」、「孫（ソン）」、「尹（ユン）」、「洪（ホン）」、「成（ソン）」、「張（チャン）」、「申（シン）」、「宋（ソン）」、「全（チョン）」などがある。また、「南宮（ナムグン）」、「皇甫（ファンボ）」、「西門（ソムン）」などの2文字の漢字姓も存在する。

名前の付け方に関して、韓国では一族の決まりや陰陽五行説に基づく命名が一般的で、

日本のように親の名前から一字を取る習慣はない。韓国の男性名では「土」「水」「金」「木」「火」の部首を持つ漢字が多く見られ、これも陰陽五行説に由来する。

このように、韓国の姓に関する特有の伝統は、その歴史や社会を理解する上で重要な鍵となっている。

## 4 儒教

**現在でも生活規範に大きな影響を及ぼしている**

５１８年間も続いた朝鮮（チョソン）王朝の国教は儒教であった。

特に、儒教の中でも名分を重んじる朱子学（中国の南宋の時期に朱熹〔１１３０～１２００年〕によって導かれた儒教の学問体系）こそが朝鮮王朝が取りいれた儒教の根幹となっていた。

そもそも建国当時の朝鮮王朝は、滅ぼした高麗（コリョ）王朝（仏教を国教にしていた）を否定するために儒教を大いに活用した。仏教寺院に支配されていた土地や奴婢を没収する手段でもあったのだ。

さらに、朝鮮王朝では官僚登用の手段として、朝鮮王朝以前から制度としてあった科挙をさらに強化した。試験では儒教の教義を問う質問が多かった。その中で儒教的な道徳と

第

# 3

章

# 英雄たちが躍動した「三国時代の人物」

# 1 朱蒙

## 神話と伝説に彩られた「高句麗の始祖」

韓国の人たちは「高句麗（コグリョ）」という国家に特別な自尊心を持っている。民族にとって最大の版図を築き上げたという偉業は、たとえ空想であったとしても、古代の浪漫と密接に結びついているのだ。その高句麗の初代王という存在感は、民族が続くかぎり永遠の輝きに満ちている。

しかし、実のところ、朱蒙（チュモン／紀元前58～紀元前19年）がとてつもない英雄であることはわかっていても、その人物像は謎に包まれている。

なぜなら、彼は神話の中で、「柳花（ユファ）」という女性によって卵から生まれた、とされているからだ。古代において、卵から生まれる英雄の伝説はアジア各地で数多く語られており、彼の偉大なる業績に華を添えるために「卵から誕生」という神話が創られたと言える。

古代の歴史をさぐるときにアテにできる『三国史記』によると、肥沃な卒本（チョルボン）にやってきた彼が、現地の国王と親しくなったという逸話が紹介されている。

「国王には3人の娘がいたが、息子はいなかった。国王は朱蒙の非凡な才能を見抜き、次女を彼に嫁がせた。この結婚を通じて、朱蒙は王位を継承することとなった」

国王となった彼は、領土を拡張する野望を胸に、隣接する沸流国の松讓王（ソンヤンワン）のもとへと赴き、直接交渉の場を持った。

「私は天帝の子である。あなたは私に従うべきだ」

朱蒙は力強く宣言した。しかし、あまりに唯我独尊すぎる発言だ。松讓王が不機嫌になるのも無理はない。

「この土地に国王は私だけでいい。君こそ、私に従うべきではないか」

憤慨した朱蒙は「勝負によって決めよう！」と迫った。

弓の腕前を競う勝負が繰り広げられ、朱蒙の勝利で幕を閉じた。松讓王は降伏し、朱蒙の配下となった。

朱蒙はその後も勢力を拡大し、周辺国を支配下に置いた。こうして彼は、高句麗の初代王として自らの名を歴史に刻みつけた。

紀元前19年、39歳で彼はこの世を去ったが、その後も「古代最強の男」として称えられ続けている。諡（おくりな）は東明（トンミョン）。歴史的には「東明聖王」と称されている。

ただし、朝鮮半島における歴史が明確な事実とされるのは3世紀以降であり、それ以前に活躍した朱蒙に関しては神話と現実が入り交じり、真実は依然として霧の中に隠れていると言えるだろう。

## 2 近肖古王

### 百済を強国に導いた勇猛な統治者

百済の13代王・近肖古王（クンチョゴワン／?～375年）の存在は日本の古代史にとっても重要である。彼が372年に使者を日本に派遣して七支刀（しちしとう）を贈っているからだ。刀身が7つの枝に分かれている七支刀には、「刀を帯びる者は百の兵を撃退して、王になるほどの霊力を得られる」という文字が刻まれている。

この刀が日本に寄贈された372年というのは、百済にとってどんな時期なのだろうか。実は、371年に百済は高句麗に対して軍事的な成功を収めていた。そこで、近肖古王は中国大陸の東晋に使者を派遣して、高句麗への勝利を報告して国家としての承認を受けている。

さらに、日本に使者を送って、「高句麗より優位に立っていることを東晋から承認された

事実」を伝えた。その際の贈り物が七支刀だったのだ。ちなみに、この刀は奈良県天理市の石上神宮（いそのかみ）の社宝となっている。

中国や日本に対しても百済の存在感を誇示した近肖古王。彼は古代の戦国時代に強烈なカリスマを発揮した統治者であった。

国土を豊かにして兵力を増強する政策を巧みに採用し、兵士たちには厳しい訓練を命じ続けた。その結果として、百済は建国以来の最大領土を誇る強国へと変貌を遂げた。

しかしながら、高句麗は決して百済を安寧のままにしておくことはなく、たびたび侵攻してきた。

その厳しい状況の中で、近肖古王は新羅との堅固な友好関係を築き上げ、強敵の高句麗に果敢に立ち向かっていった。

３７１年には、高句麗の激しい攻撃を勇猛に撃退し、敵軍を執拗に追い詰めた。百済の軍勢３万人は力強く平壌（ピョンヤン）へと進撃し、この要塞都市を包囲した。高句麗は必死の防戦を繰り広げた。

そのような戦乱の中で、高句麗の内部情報を掌握している者から重要な報告が届いた。

「高句麗の兵は大部分が名ばかりの兵に過ぎません。真に恐れるべきは赤い旗の部隊のみ

です。この部隊を打ち破れば、他の兵たちは自然と退散するでしょう」

貴重な情報を手にした百済軍は、迅速に赤い旗の部隊をターゲットに攻撃を仕掛けた。矢の雨が降り注ぐ中、戦闘の最前線で高句麗の故国原王（コググォンワン）は命を落とした。

国王の死により、高句麗の兵たちは士気を喪失した。

しかし、百済軍の総司令官であり近肖古王の息子である須（ス）は、さらなる追撃を望んでいた。だが、冷静かつ叡智に満ちた莫古解（マクコヘ）将軍が彼を制止し、「これ以上の欲張りは賢明ではない」と諭した。この言葉に須も納得し、百済軍は故郷へと凱旋した。

近肖古王のもとで百済軍は、結束の強さを示した。戦場だけでなく、経済や文化の面でも彼は卓越した才能を発揮し、中国との交流を一層深め、先進文化を巧みに導入した。結果として、百済は漢字や仏教を早い時期から取りいれることに成功し、文化的にも豊かな国へと成長を遂げた。

このように、近肖古王の治世は、戦国の混乱を乗り越えて百済を最大の繁栄へと導いた、彼の力強い統治と卓越した戦術は、後世においても長く語り継がれている。まさに、それは百済の黄金期を築いた栄光に満ちた瞬間であった。

## 3 広開土大王

### 歴史上の最大領土を築いた唯一無二の大王

韓国は狭い国だ。それゆえ、自国の歴史で史上最大の領土を確保した広開土大王（クァンゲトデワン／374～413年）はとても人気がある。彼の本名は「談徳（タムドク）」という。幼い頃から志が高かった。

ある日、彼は能力抜群で野性味あふれる馬を贈られた。談徳は乗馬の技術に長けてはいたが、この特別な馬だけはなかなか手なずけることができなかった。そんな中、気配り上手な側近が他の扱いやすい馬と交換しようと提案した。しかし、これが談徳の心には全く響かなかった。

「1頭の馬に手を焼いていて、どうして大軍を指揮することができようか」

彼は家臣をきつく叱責し、再びその野生馬に立ち向かった。しかし、何度挑戦しても結果は落馬の連続だった。最終的には、談徳を振り落とした馬は遠くへ逃げ出そうとした。

憤怒に燃える談徳は、その馬に向かって弓を引いた。彼の内心は怒りに満ちていたが、最終的には弓矢を放つことはなかった。むしろ、自らの未熟さを深く恥じ入ったのだ。

談徳が城門の前に着いたとき、後ろから馬蹄の音が近づいてくるのが聞こえた。振り返ってみると、逃げていたはずの馬が戻ってきていた。

それでも彼は知らん顔をして城の中へ入ろうとしたが、馬は談徳の前でピタリと立ち止まった。

その馬に談徳が再びまたがると、彼の意のままに動いた。少年時代の談徳にとって、野生馬を手なずける経験は非常に大きな自信となった。

３９１年、彼は17歳で高句麗の19代王として即位した。談徳の最初の目標は百済の打倒であった。

当時、高句麗と百済は一進一退の攻防を繰り広げていたが、談徳には祖父の16代王・故国原王（コググォンワン）が３７１年に百済との戦闘で命を落とした仇を討つという使命があった。

彼は百済に対して執拗なまでの攻撃を仕掛け、遂には完全に屈服させた。さらに、野望は中国東北部へと広がり、そこへ大軍を送り込み、領土拡張を図った。そこは、もともと高句麗の領土であった。失われていた土地の奪回に情熱を燃やしたのだ。

談徳は王宮での安寧な生活を捨て、毎日を馬上で過ごし、城を落とすことにかけては天

才的な才能を発揮した。

また、外交戦術においても巧みに周辺国との同盟を結ぶことで敵を孤立させた。その成果で、談徳は朝鮮半島の歴史上最大と言える広大な領土を確保した。

彼はただの無骨な国王ではなく、仏教の布教や文化の発展にも力を注いだ。これほどの名君であったが、寿命には恵まれず、４１３年に38歳で世を去った。

息子の長寿王（チャンスワン）は、４１４年に『広開土大王碑』を建てて、後世の人々に父の功績を伝えた。談徳の諡は「広開土大王」であり、「広く土地を開いた国王」という意味が込められていた。

広開土大王は、ただ領土拡大を望むだけではなく、学問や文化に対しても情熱を傾け、その治世を通じて国を強固にし、民を豊かにした。

彼の死後、数多くの国王が彼のようになろうと努めたが、広開土大王のような国王は二度と現れなかった。

## 4 武寧王 民衆から慕われた百済の名君

強い百済は遠い過去だった。

近肖古王が去ってから、百済は厳しい苦戦を強いられていた。寒冷な地域を領土としている高句麗は、温暖な土地を求めて南下政策をとることが国是になっており、高句麗は475年に大軍を動かして百済に攻め込んだ。壮絶な戦いが繰り広げられて、百済は徐々に劣勢となり、21代王・蓋鹵王（ケロワン）は避難途中、高句麗の軍によって命を奪われるという悲劇に見舞われた。

百済にとっては、まさに危機的な状況であったが、都を南に位置する熊津（ウンジン）へと遷都し、高句麗の攻撃からようやく逃れた。この地は、現在では公州（コンジュ）として知られている。この遷都によって、百済は何とかして劣勢を挽回した。

501年、25代王として武寧王（ムリョンワン／461～523年）が即位した。彼は24代王・東城王（トンソンワン）の血を引く息子であり、『三国史書』において「情の深い寛大な人」と評されており、民衆たちからも非常に慕われていた。

彼の容姿は絵画のように美しかったという。人気は絶大で、武寧王には名君としてのエピソードが豊富に残されている。

たとえば、506年に百済全土が疫病の蔓延と雨不足に見舞われ、民衆は飢餓に苦しむ事態となったが、武寧王は穀物を配布し、飢えた民衆を救済した。510年には、堤防を築き水害を阻止し、避難していた人々を農村へと送り返して耕作に従事させるという施策も実施した。

また、武寧王は高句麗との争いにおいても堅固な防衛力を持ち、負けることはなかった。このように武寧王は523年まで百済の国力を向上させる善政を行い、華麗なる王朝文化も作りだした。

彼の治世における輝かしい業績は、百済の黄金期を彩る栄光の1ページだった。

「これほどの大王のもとで暮らしていた当時の人々は、どんなに恵まれていたことか」

そんなふうに素直に思える。

しかし、歴史は残酷だ。「名君の治世は短く、凡庸な国王の時代は長い」というのが歴史の常であるからだ。それでも讃えるべきものは大いに讃えよう。武寧王の治世は、その後の悠久の歴史の中で語り尽くされることで現代にも「理想郷」の響きを持っている。

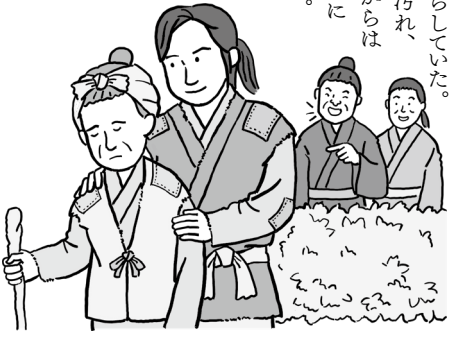
# 5 ピョンガン王女と温達

## 永遠に語り継がれる歴史エピソード

高句麗の
平岡（ピョンガン）王の
娘として
生まれた王女は、
とても泣き虫であった。

「泣いてばかりいたら、
良家に嫁ぐこともできない。
仕方がないので、
馬鹿の温達（オンダル）に
嫁がせよ」

温達は心が優しい男だったが、
目が不自由な母と共に
貧しく暮らしていた。
身なりは汚れ、
近所の人からは
いつも馬鹿に
されていた。



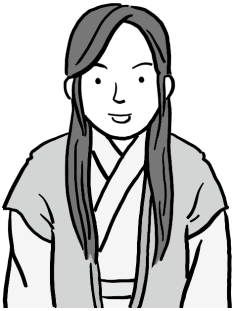
王女が16歳のとき、
王は彼女を立派な家柄に
嫁がせたいと思ったが、
王女はとても
反抗的だった。

「いつも『温達の妻になれ』と
言われ続けたから、
その通りにします。
王が言葉を
ひるがえしてはいけません」

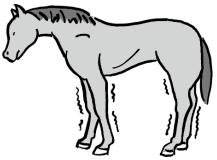
王は大いに怒ったが、
王女は王宮を飛び出し、
粗末な家で暮らす
温達を訪ねた。
温達は
ビックリして
しまった。

「とうてい現実と
は思えません。
もしや妖怪が
化けているのかも?」

王女は追い返されたが、
温達と母親を熱心に説得した。
結果として、
王女は自分の金の腕輪を売り払って、
彼らの暮らしを豊かにした。

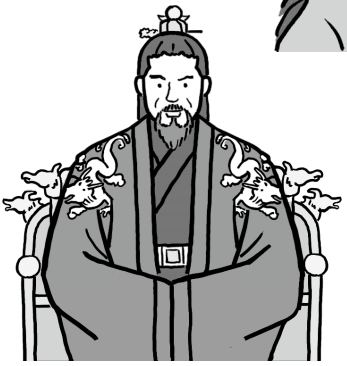


「馬を買ってください。
でも、高価ではなく
貧弱な馬を
選べばいいです」



王女の
献身的な世話で
痩せた馬が
立派になり、
温達はその馬に乗って
王の狩猟に参加して
多くの獲物を
獲得した。

戦争になって
温達が戦功をあげて、
王は彼に高位を授けた。
名声がとどろき、
「馬鹿の温達」という言葉は
完全に消え去った。
すべては王女の
力強い支えがあったからだ。



**「あの『馬鹿の温達』が**
**これほどの**
**勇者だったとは？**
**彼こそ、**
**余の立派な婿である」**

590年に
平岡王が亡くなり、
次の嬰陽王（ヨンヤンワン）が即位した。
温達は新しい王に向かって
懇願した。

**「新羅（シルラ）に土地を奪われ、**
**民が困っています。**
**私が土地を**
**取り戻してきます！」**

激戦が続いて
温達が命を落としてしまった。
彼の遺体をおさめた
棺が用意されたが、
棺を載せた台車は
まったく動かなかった。

**「安らかに
お眠りください」**

王女が慰めの言葉を
棺に向かって語ると、
台車がようやく動き始めた。
国の人々は彼の死を
心から悼んだ。

ピョンガン王女と馬鹿の温達のエピソードは韓国の人なら誰でも知っている。まさに国民的な逸話だと言えるだろう。

これは実話がベースになっていて、『三国史記』に詳しく2人の行跡が載っている。この逸話に出てくる平岡王というのは、史実では高句麗の25代王・平原王（ピョンウォンワン／在位は559～590年）のことだ。彼の娘がどういうわけか身分が釣り合わない男と結婚した。それが、周囲から馬鹿と言われていた温達だった。彼はいくつかの戦いでめざましい活躍をして、立派な将軍となった。しかし、590年に新羅との戦争で戦死している。

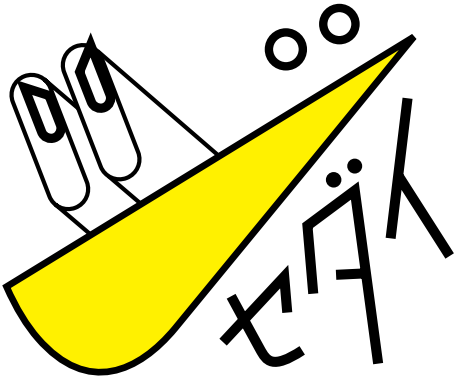
そして、王女の悲しみは現代に至るまで朝鮮半島で語り継がれてきたのである。

## 6 真興王

### 花郎を作った新羅の戦略的な国王

新羅（シルラ）の華々しい時代を築いたのが、24代王として即位した真興王（チヌンワン）であった。

彼は534年に生まれた。当時、新羅は高句麗と百済という強大な隣国に圧迫され、厳しい領土争いの渦中に身を置いていた。




# 何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

# 行動せよ!!!